

小町「みるめなき……」の歌の解釈について

——掛詞を媒介とした挿入句的修飾句の表現——

室 田 知 香

序

本稿は『古今集』恋三の部の巻頭近くにある次の小町の歌の解釈を検討するものである。

a みるめなきわが身をうらとしらねばやかれなであまの足たゆくく
をののこまち

る (古今集・恋三・六二三)

「初二句の意、むかしより説得たる人なし」(本居宣長『古今集遠鏡』)といわれ、特に上の句の各語のかかりうけとその解釈について諸注釈書がさまざまな説を提示してきた一首である。この一首の解釈を検討し、小町の歌の特質を考えてみたい。

当該歌はこの直前の業平の六二二番歌「秋ののにささわけしあさの袖よりもあはでこしよぞひちまさりける」とともに『伊勢物語』二五段にも収録されており、『伊勢物語』では六二二番が贈歌、「みるめなき……」の歌が返歌となっている。『伊勢物語』二五段の解釈が混入しているような『古今集』注釈書もあるが、『伊勢物語』二五段の注釈書自体については、管見のうちでは本稿にとらえる問題と照らし合わせてとりあげるべきものは見出せなかつた。本稿では『古今集』の注釈史を中心に問題点を洗い出すこととし、『伊勢物語』の諸注釈書

は割愛する。

一 諸注釈・諸論考における解釈

まずは上三句について諸説を列挙する。

顕昭『古今集註』では「返哥ノワガミヲウラトツツケタルハウシトイフココロニソヘタリ サラズハミルメナキウラトワガミヲトゾツツクベキ」(傍線稿者)とあり、上三句の語順は「浦(うら)」に「憂(う)」の意がかかっているがゆえのものととらえている。また頭書に「我身ヲウラトハ小町ガ身ヲ読カト思ベキニ未逢前ニオトコヲウラムベキニアラス。サレバ業平ガアハヌヨシヲウラミタレバ業平ガ身ヲウラトモシテスシテナニカクルトイフナルベシ」とある。「業平ガ身ヲウラトモシテスシテ」は「業平ガ身ヲウラトモシラズシテ」の衍である。この直前に配されている業平の六二二番歌と当該歌が『伊勢物語』二五段のような贈答歌と同様に解されるべきものであるととらえているのであろう。その上で、「見るめなきわが身」とは女に会えないでいる業平自身の身であるとし、会えることもない自分自身の身を「憂(う)」「く思(う)」「浦(うら)」とも知らないで、という意にとっているのである。

藤原定家『顕註密勘』の顕註部分では、「見ることもなき我身をうらとそへたる也。但わが身とよむは此うらみをこせたるおとこの身をうしと思ひしれとよめる也。又我身をうらむともしらねばやともよめる成べし」とある。最後の部分に分かりづらいが、「うら」に掛かるのは「う、(憂)し」のほか「う、らむ」も捨てきれないことを付加する説明か。あるいは第二の解釈として小町自身の身を「うらむ」意の可能性に言及したのか。この顕註については定家の密勘部分も「此哥の心かきあらはされて待めり」と賛同し、「我身を浦としらねばやかれなでしげくくるとぞ侍し。おとこの身をうしと思へとも侍なん。小町の心そらにはかり難し」と記している。この定家の述べ方も同様に曖昧で分かりづらいうように思われる。が、顕昭の解釈は「わが身」を相手の男とする解釈を第一とするのであろう。こののち、契沖『古今余材抄』も『顕註密勘』を引き、特に異論を記していない。

本稿冒頭にも引いた本居宣長『遠鏡』はまた異なる見解を示している。「海松メノ無イ浦ヂヤト云事ヲシラズニ 海士ガミルメヲ苅ウト思フテヒタモノ来ルヤウニ アノ御人ハ ワシガ身ヲ ドウモ逢レヌ身ヂヤトハ 知ラシヤラヌカシテ 一夜モカゝサズニ 足ノダルイニ 毎夜く逢ウト思フテ見エル トテモアハレハセヌノニサ」(傍線稿者)と訳し、「初二句の意、むかしより説得たる人なし、是は春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝといへる類にて、詞を上下に打かへして心得べき格也、我身をみるめなき浦としらねばやといふこと也、みるめなき浦とは、逢がたき身といふ意也、浦は、たゞ見るめによれる詞のみ也、されば我身を恨むとも、うしとも、いひかけたるにはあらず」(傍線稿者)と述べている。傍線部が上三句「みるめなきわが身をうらとしらねばや」の解釈に相当する部分である。「詞を上下に打かへして心得べき格也」ともあるように、当該歌の上三句は語順が整わない表現であると考え、「我身をみるめなき浦としらねばや」の意ととらえているのである。

『遠鏡』は、「わが身」は「ワシガ身」、詠み手自身のことととら

え、かかりうけについては「みるめなき」から「わが身」へのつながりはないものと見、「みるめなき」は「浦」にかかる句ととらえているわけである。そして、「わが身」を「恨む」あるいは「憂し」と思うという意味合いはないものと見ている。前掲顕昭注や『顕註密勘』とはまったく異なる解釈である。

『遠鏡』の説については藤井高尚『古今和歌集新釈』も賛同している。が、香川景樹『古今和歌集正義』(一八三二年成立、一八三五年刊)のように、「此歌此解の意ならむには、見る目なき浦と我身をしらねばやといひおろして事もなく、中々しらべもまさるにあらずや」という疑問を示す注釈書もある。景樹自身の解釈としては、「さばかり見苦しき我身をよにうき物ともしらねばや足のたゆきにしげくも通ひくる事よ」と全体をとらえている。すなわち、「わが身」を詠み手自身の意ととらえ、「みるめなき」は「見苦しき」の意で「わが身」にかかるととらえ、「見苦しき」詠み手自身を「よにうき物」と述べたのが初二句であると考えられているのである。「わが身」を詠み手自身とする点は『遠鏡』と共通するが、景樹『正義』は語順が整わない表現であるとは見ず、「みるめなき」が「わが身」にかかるととらえ、その「みるめなき」とは「見苦しき」いことであるととらえているのである。

近現代になると、「みるめなき」を「わが身」にかかる語句ととらえ、「わが身」は詠み手自身のことととらえる注釈書が主流となる。そして、「みるめなきわが身」を「憂し(うし)」と思う「浦(うら)」と、掛詞の要素を介在させて把握するのである。このような解釈を示す近現代の諸注釈書のうち、その「憂」の意味合いについては、相手の男にとってつらくつれない意ととらえる注釈書と、詠み手自身にとって憂くつらい意ととらえる注釈書と、二つの立場がある。

前者の解釈をとるのは、金子元臣『古今和歌集評釈』(明治書院 一九〇一年)、窪田空穂『古今和歌集評釈』(東京堂 一九三五〜三七一年)、日本古典文学全集『古今和歌集』(小学館 一九七一年)、新編

日本古典文学全集『古今和歌集』（小学館 一九九四年）である。後者の解釈をとるのは、新日本古典文学大系『古今和歌集』（岩波書店 一九八九年）、片桐洋一『古今和歌集全評釈』（講談社 一九九八年）、高田祐彦『古今和歌集——現代語訳付——』（角川ソフィア文庫）（角川書店 二〇〇九年）である。「みるめなき」の部分の解については、前者の諸注釈書と後者の諸注釈書で特に明確に分かれるわけではなく、それぞれの口語訳を見ると、「逢ひ見るといふ事の無い」（金子）、「相逢ふ時のない」（窪田）、「逢う機会を作ろうともしない」（新日本古典文学大系）と解釈されている。なお、日本古典文学全集も頭注では「男を見よう（逢おう）」という気持のない」という解釈を示しているが、現代語訳では「人を見る目をもたぬつれない女」（傍線稿者）としており、この「人を見る目をもたぬ」という解釈は独自の解釈である。

詠み手自身の身を「憂うれく思う」という意をとらえる解釈については、前掲顕昭『古今集註』の頭書において早くに「我身ヲウラトハ小町ガ身ヲ説カト思ベキニ未逢前ニオトコヲウラムベキニアラス」という疑義が呈されていたわけであるが、竹岡正夫『古今和歌集全評釈』（石文書院 一九七六年）もこの頭書を引き、「この歌の配置上やはりまだ早い」と述べている。また、竹岡氏は、近現代の諸注釈書における「見る目なきわが身」という語句の解釈についても、逢いたい気持ちのない我が身の意ととらえられることがしばしばあるという点を問題視し、「見る目」の他の用例に照らして疑問であると述べている。その上で竹岡氏自身は顕昭『古今集註』の説に戻り、「わが身」を相手の男ととる顕昭説を良しとしている。が、片桐洋一『古今和歌集全評釈』はこの顕昭や竹岡氏の解釈をとりあげ、当該歌の「わが身」を相手の男の身とする解釈は用例に照らして成り立たないとしている。本稿者としても、「みるめなき」を「あなたと」会うことのない」という意でとらえれば竹岡氏の批判は当たらないであろうし、配列との関係についても竹岡氏のようにとらえるのが適切であるのか否か、検

討の余地があるのではないかという疑問がある。竹岡氏と同様に顕昭説を受け継いだような解釈を示す注釈書としては、中島輝賢『古今和歌集』（角川文庫ビギナーズ・クラシックス）（角川書店 二〇〇七年）がある。

このほか、近現代の注釈書の中には、「みるめなき」は「わが身」にかかっているととらえ、「わが身」は詠み手自身のことであるととりつつ、しかし「浦」に「憂」の意が掛け合わされているととらえている節の見られない小町谷照彦『古今和歌集』（ちくま学芸文庫）（筑摩書房 二〇一〇年）のような解釈もある。これは『遠鏡』の説を継ぐ解釈であろう。

『遠鏡』の解釈を発展継承しようとした解釈として佐伯梅友氏の一九五二年の論考における解釈もある。佐伯氏は『遠鏡』がとらえようとしていた意味合いには賛同し、「我が身をみるめなき浦と知らねばや」と解したいとしながら、しかし語順に問題があるという前掲香川景樹の疑問にも賛意を示している。その上で、次の歌を挙げて、「わが身」は「うら」を導く「一種の枕詞のようなものとしてみてはどうか」という見解を示し、「みるめなきわが身をうらと知らねばや」は語順を変えずともその意としては「わが身をみるめなきうらと知らねばや」と同じ意で解釈することができるという見地を示している。

b 人をうらみてつかはしける

藤原惟規

いけにすむわがなををしのとしかへす物ともがなや人をうらみじ
 このbの歌は『古今集』中にもほぼ同じ歌が収められている。次の歌である。

（金葉集二度本・恋上・三九一）

池にすむ名ををし鳥の水をあさみかくるとすれどあらはれにけり

（古今集・恋三・六七二）

右の二首において、初句「いけにすむ」は明らかに点線部「わがなを」や点線部「なを」を飛び越えて「をし」「をし鳥」にかかっている。佐伯氏はbの例を参考にしつつ、当該歌についても、この語順の

まま、特に不整合はなく、「みるめなき」は「うら」にかかるという新説を唱えているのである。

佐伯氏の解釈は前掲『遠鏡』を受け継ぐようにする解釈なのであるが、歌全体の意味のとらえ方としては、近現代以降の「わが身」を詠み手自身の意にとつてかつ「うら」に「憂」の意が掛け合わされているとする解釈を合わせたような解釈となっている。佐伯氏の解釈をそのまま引用すれば、「われは我が身を憂しと思つていて、人にあう意志はない、すなわち、みるめなき浦なのであるが、そうとは知らないで」という解釈である。

佐伯氏は自身が校注した日本古典文学大系『古今和歌集』（岩波書店 一九五八年）においても、「わが身を―憂」といいかけた枕詞。↓九三八「身をうき草の」・六七三「名ををし鳥の」。「見るめなき」は「うら」にかかる。」と記している。「わが身を」と「憂」の結びつきの強さをとらえ、かつ、初句は「うら」にかかつていく句であるという解釈を示している。一九五二年の解釈を変えてはいかないものと思われる³。

このように近現代に至るまで諸説紛々としており、諸注釈書の見解が分かれ続けている一首である。そのような中で本稿では佐伯梅友氏の説に注目したい。佐伯氏の解釈については、竹岡正夫『古今和歌集全評釈』が前述の観点、すなわち、配列上はまだ女が「憂」き身を詠むのは早いという観点、及び、「みるめなき」を「会う意志のない」とするのは用例に照らして賛同しがたいという観点から疑義を呈しているが、かかりうけについては難じてはいない。難じがたい点であるのであろう。にもかかわらず、このかかりうけでとらえた場合の解釈の可能性をさらに検討しようとする注釈書はその後も見出だされないようである。今日、さらに検討してよい見方であろう。

二 上三句の「よ」のかかりうけについて

当該歌の解釈として、稿者は、初句「みるめなき」は「うら」にかかる句とみてよいのではないかと考えている。一首全体の解釈は佐伯氏とは異なる解釈を考えているが、まずはそのようなかかりうけの蓋然性について用例を挙げて検証したい。佐伯氏が挙げている例以外の用例も挙げて考えてみよう。

c 神やまの身をうのはなのほとぎすくやくやくしとねをのみぞな
く (古今六帖・「ぎふの思」・二一八)

d いけづらにかしらしろき女の、うきなきつみけるをみて

おい人のつみつるものはさはべなるよをうきなきのしたばなりけり (安法法師集・五二)

e 正月をはり

あさひさすけさの雪げに水まさりよをうきはしのゆくへしらなみ (好忠集・二三)

右のcは、「神やまの」は点線部「身を」を飛び越えて「うのはな」にかかる。「うのはな」の「う」の響きが「憂し」の語幹である。「憂(う)」の連想を喚起しており、その「憂(う)」の語がさらに「身を(憂)」という人事的な文脈を連想させ引き連れてきているのである。そして、「身をう(憂/卯)のはな」という表現を生成している。

dも、「さはべなる」は明らかに点線部「よを」を飛び越えて「うきなき」にかかっている。沢のほとりにある「うきなき」(水葵)の名に「うき」とあることから、「世を憂き/浮きなき」と洒落てみせた表現である。

eは、末尾も掛詞となるので他の二例に比べるとやや不鮮明な印象はあるが、「朝日射す今朝の雪消に水まさり、浮橋のゆくへ知らず」というのが主軸となる文脈ととらえてよいであろう。点線部「よを」はその文脈に割り込むかたちで嵌め込まれている句である。

これも「浮橋」という語の「浮」が「憂き」の響きを有しているために、「世を憂き」という人事的な文脈が引き連れられてきて、「世を憂き／浮橋」という挿入句的あるいは装飾的な修飾句を冠した表現が成り立っている。

このように、「う（憂）」の響きがあった場合に、「世を憂」しと思ふ、あるいは「身を憂」しと思ふ、といった人事的な文脈がその響きによって喚起され、引き連れられてきているという例、いかえれば、「う（憂）」の響きがあった場合に「身を」「世を」といった挿入句的あるいは装飾的な修飾句がその直前に割り込むようにして嵌め込まれるという例は、他にも拾うことができる。

f をとこの物いひけるをさわぎければ、かへりてあしたにつかはしける

白浪のうちさわがれてたちしかば身をうしほにぞ袖はぬれにし

（後撰集・雑二・一一五八）

「うしほ」ということばを用いる際に、「身をうしほ（憂／潮）」と言いたくて「身を」がはさまっている。「身を」の部分以外は「白浪」「さわぐ」「たつ」「うしほ」「ぬれ」といった海に関わる物象語が散りばめられている感の強い一首である。海景をいうような文脈の中に挿入句的に「身を」が嵌め込まれている。

g

なにはづにけふこそみつのうらごとこれやこのよをうみわたるなりひら

ふね

（古今六帖・「ふね」・一八〇八）

右のgは、他出資料のうち『伊勢物語』六六段の諸本においては初句「なにはづを」となっており、『後撰集』雑三・一二四四番歌でも「なにはづを」、『業平集』の『私家集大成』所収諸本では「なにはづを」「ナニハメヲ」となっている。が、「なにはづに」という本文も右のように存在する歌である。

このgの初句は、「なにはづを」という本文であれば「けふこそみつ」にかかると解せるが、「なにはづに」であれば「みつのうらごと

に」という句とともに「うみわたる」にかかっていく句であろう。すなわち、gの歌は、もしも「けふこそ」「このよを」という部分があれば、

なにはづに みつのうらごとこれや うみわたるふね

というように、海景を描いた一首と見ることができるところに、「みつ（御津）」と「みつ（見つ）」、「うみわたる（海渡る）」と「うみわたる（倦みわたる）」の響きがあったことから、それら掛詞による連想を媒介として「けふこそ」「このよを」という人事的な文脈を形成することばが想起され、挿入句的に嵌め込まれている。難波津に、「今日こそ見つ」（今日こそ見た）の御津（みつ）の浦ごとに、これこそ、「この世を倦みわたる」、海渡る、船よ、と詠ずる一首である。

h これはきさきさきの御歌にて

しるべするくものふねだになかりせばよをうみなかにたれかしら

まし（伊勢集・五七）

伊勢が『長恨歌』を題材とした屏風絵に添えた屏風歌の一つである。「きさきき」すなわち楊貴妃の立場で詠んだ一首である。

このhも、「よを」なしで一首が成り立つ歌である。「しるべするくものふねだになかりせば、うみなかにたれかしらまし」、すなわち、（私の居場所）案内をする雲の船（方士の乗り物であろう）さえもなかったならば、大海の中で誰が私の存在を知ってくれるだろう、誰も知らないままだっただろうに、と解せる一首である。方士が天地を駆け巡り、海中の仙郷、蓬萊にいる楊貴妃を探しあてたことをいう一首であろう。その「うみなか」の「うみ」に「倦み」の響きがあることから、「よを」が引き連れられてきている。憂いに沈んで、「世を倦み」、人間世界を厭い果ててしまったかのように、「うみなか（海中）」の蓬萊宮に過ぐす楊貴妃の身を表わしたのである。

他にもう一例挙げておこう。

i かへし

いささめにつけしおもひのけぶりこそ身をうき雲となりてはてけ

れ

(箕集・二四)

iは「けぶり」が「うき雲」となることをいうのだが、その「うき（浮き）」に「憂き」の響きがあることから、「身を憂き／浮き雲」と表わしている。これまで挙げてきた諸例と同様、前からの文脈が「身を憂き」という句を喚起しているというよりは、あとにある「うき雲」の「うき」という響きが「身を（憂き）」という句を連想させて、その「うき」に先立つ位置に添えさせている感の強い例である。

以上のように、「う」あるいは「うき」という響きを持つ物象語は「憂」「憂き」の意を喚起しやすく、前からの文脈に割り込みすらするかたちで「身を」「世を」といったきわめて人事的な意味合いの濃い語句を呼び込んできやすいのである。修飾関係として、佐伯氏が挙げた「いけにすむ名をしどり」のように、「いけにすむ」が「名を」を飛び越えて「をしどり」にかかっていくような連体修飾句の例があることも明白であるが、さらに、本稿では、「う」あるいは「うき」という響きを持つ物象語が、人事的な文脈を喚起する力、すなわち、前からの文脈に割り込みすらするかたちで人事的な語句を挿入句的に嵌め込ませる強い文脈喚起力を有しており、それを具体的にうかがわせる右のような諸例があることを押さえておきたい。

三 「みるめなき……」の歌の解釈

以上のような諸例を参考にして、稿者は、当該歌aの「みるめなき」は「わが身を」を飛び越えて「うら」の語あるいは「わが身をうら」という語句のまとまりにかかる句であると考え、「わが身をうら」は、「我が身を憂ら／浦」、すなわち、「我が身をう、（憂）しと思うら（浦）」、「我が身を憂しと思う」という名に通ずる浦である。ここは海松布など生えていない、私が我が身を憂しと思う「我が身を憂ら」（であって本当の浦ではない浦）と知らないからか、海草が

「枯れ」ることがないように、「離れ」もせずに海人が足もだるくなるくらいやって来るよ——「海松布」のないことも知らずに足もだるくなるくらいやって来る「海人」のように、愚かにも、「海人」と見立てた男が「見る目」（逢う機会）のないことも知らずに頻繁にやってくる、と揶揄してみせた歌である。恋三の部のこのあたりの配列ではまだ男に相逢う前であるから女にとつての「憂し」の意をとるのはおかしいと評するほどのことはなくてよいだろう。私が憂愁に沈んでいる「憂」ら、と洒落てみせることによつて、「みるめ（海松布／見る目）」などないのに海人と見立てた男が無駄に足の疲れてだるくなるくらいやってくる、その姿を小馬鹿にするかのように皮肉な機知をもつて表わしたのである。

【試訳】

ここは「海松布」など生えていない、我が身を「憂」く思う「わが身を憂ら（浦）」（であって本当の浦ではない浦）と知らないからか、海草が「枯れ」もしないように「離れ」もせず、海人が足の疲れてだるくなるくらいひっきりなしにやって来るよ。——（その海人のように愚かにも）「見る目」（会う機会）などない知らないからか、（あの人は）足の疲れてだるくなるくらいひっきりなしにやって来るよ。

ここで佐伯氏の解釈との違いも整理しておこう。

佐伯氏と異なるのは、佐伯氏は結局のところ、「われは我が身を憂しと思つていて、人にあう意志はない」（前掲引用箇所）というように、詠み手が「我が身を」「憂」しと思うことと「人にあう意志はない」ということを一連なりの文脈の中にとらえる解釈を示しており、歌全体の解釈としては金子評釈・窪田評釈・新編日本古典文学全集とほぼ同様な解釈となっているが、稿者は「会うことがないからつらい」とか「わが身をつらいものと思つているから、会わない」といった意味合いはとる必要はないと考えているという点である。「みるめなき」はあくまで「うら」の語（あるいは「わが身をうら」というま

とまり)にかかつており、その「うら」にかかる際の「みるめなき」の意味合いは「海松布なき」が第一義であって、「わが身をうら」は本當の浦ではないことをいう趣旨が眼目である。憂愁は会わないことの直接的な理由とする必要はあるまい。自身の憂愁を逆手にとつてレトリックの中で男をはねつけるための武器として用いているという程度にはいえようが、そこに直接的な因果関係を見るのではむしろこの歌のレトリックにある機知が見えなくなってしまうように思われる。

四 小町の歌における掛詞を媒介として嵌め込まれた挿入句的修飾句

当該歌の解釈と他の類例を踏まえてさらに考えてみたいのは、このように掛詞を媒介として嵌め込まれる挿入句的修飾句の表現は小町の歌の一つの特色をなしているという点である。

当該歌^aは、主たる文脈とそこに割り込むようにして嵌め込まれた表現とを分けて記すと、次のようになる。掛詞には傍点を付す。

みるめなき　うらとしらねばやかれなであまの足たゆくくる

わが身を憂

「海松布なき浦と知らねばや、離れなで海人の足たゆく来る」(海松布がない浦と知らないからか、離れもせず海人が足もだるくなるくらいやつて来る)という海辺の景を描いた一連なりの文脈がある。その文脈に割り込むようにして、「憂(う)」と「浦(うら)」の掛詞を媒介としながら想起された「わが身を(憂)」という表現が「う」に先立って挿入句的に嵌め込まれ、一首の歌として成り立っている。なお、「うら」は「憂(う)」と「浦(うら)」の掛詞と考へ得るほか、「うらむ」の語幹の「うら」と「浦」の掛詞とも考へ得、両者を曖昧に含みこんでいる可能性もあるが、aの歌の構造や文脈構成を考える際にはその差は問わずともよいように思われるので、今は措く。

他の有名な小町の歌々を同様に記せば次のようになる。

j わびぬれば　浮き草の根を絶えてきそふ水あらばいなむとぞ思ふ
 身を憂

(古今集・雑下・九三八)

k 花の色はうつりにけりないたづらに
 降る長雨せしまに

わが身世に経る眺め

(古今集・春下・一一三)

l 秋風にあふ田の実こそかなしけれ
 実むなしくなりぬと思へば

わが身むなしく

(古今集・恋五・八二二)

jは主たる文脈としては、「わびぬれば、浮き草の根を絶えて、きそふ水あらば、いなむとぞおもふ」(もう苦しくなつてしまったから、浮き草のように根を絶えて、誘ってくれる水があつたら、そちらのほうへ行こうと思う)という文脈を押さえることができる。そこに、「浮き草」の「浮き」に「憂き」の響きがあることにより「身を」という表現が想起され、挿入句的修飾句のようにして文脈に割り込むかたちで嵌め込まれ、jの歌が成り立っている。「身を」「憂き」もこのように名に通ずる「浮き草」だということである。

kは主たる文脈としては、「花の色はうつりにけりな。いたづらに。降る長雨せしまに」(花の色は移ろつてしまつたよ。空しくも。しとしと降る長雨が續いていた間に)という一連の文脈を押さえることができる。そこに、「降る長雨」に「経る眺め」という響きがあることから「わが身世に」という人事的な表現が想起され、花の景を描いた文脈の中に嵌め込まれ、一首の歌が成り立っている。「降る長雨」と「わが身世に」経る眺め」の重ねは、花の色をうつろわせながら「降る長雨」と「わが身世に経る眺め」、すなわち、わが身が世に過ぐす中でただ空しくぼんやりとふけているこの物思いの時間とは、とてもよく似ている、という重ね合わせでもあるのだろう。そのような気づきを感じさせる一首である。

1は主たる文脈としては、「秋風にあふ田の実こそかなしけれ。実むなしくなりぬと思へば」(秋風に合う田の実(田の稲)は悲しいことだ。実が空しくからっぽになってしまったと思うと)という文脈を押さえることができる。「実むなしく」という表現があり、「身むなしく」と同じ響きを有していることから、「わが(身むなしく)」という表現が想起され、「田の実」を描く文脈の中に嵌め込まれている。あわせて、「田の実」には「頼み」ということばの響きも重なって聞かえよう。また、「秋」に「飽き」の響きも見出されているかもしれない、という一首である。

「うら」「うき」「ふるながめ」「みむなしく」といった我が身の憂き思いや我が身の空しさに映発するような響きの語が物象叙述の中にあつたときに、それらに人事的な意味合いを装飾的に付け添えるかのようにして、「わが身」をめぐる人事性の高いことばを割り込ませ、これらの掛詞を媒介としてその掛詞の直前に添えている。『古今集』に入集する小町の一七首(墨滅歌を入れると一八首)のうちの四首、『古今集』中の小町の「身」「わが身」を詠む歌六首のうちの四首がこのような傾向を持つことは、小町の歌の特色、特に小町における「身」「わが身」を詠む歌の特色ととらえてよいだろう。

また、以上のように見てくると、kの「わが身世にふるながめ(経る眺め/降る長雨)」という表現は、小町における掛詞を媒介として嵌め込まれた挿入句的修飾句の例の中でも、非常に凝った表現だという一面が見えてくる。この歌について高田祐彦『古今和歌集——現代語訳付——』(角川ソフィア文庫)(二〇〇九年)は、「わが身世にふる」という表現は、めずらしく、普通は、「わが身古る」(七八二)か「世に経る」(九五二)かどちらか。」と述べている。「身」と「世」を二つながら持つ一首ととらえるのであれば、類例は少なくともないようには思われるのであるが、本稿の関心から高田氏の指摘をとらえないおせば、掛詞を媒介として嵌め込まれた挿入句的修飾句の表現の中に「身」と「世」とを二つながら併せ持つ平安和歌の例というと、管見

のうちでは見出せなかった。掛詞を媒介として連想された挿入句的表現の中に「身」「世」が共起する例という条件を離れ、挿入句的修飾句が他例よりも長いという点で似るものを探せば、gの業平の「なにはづにけふこそみつのうらごとこれやこのよをうみわたるふね」なども見出せる。が、掛詞による同音の連想、及び、掛詞を媒介として連想された挿入句的表現をこそ要として、主たる文脈である物象叙述の文脈の中に心象叙述の文脈が接合されているという構造、また、そこに生まれる物象と心象の溶け合いの趣については、小町のk「花の色は……」独特のものがあはることはやはり否めまい。他に近い特徴を有する例は小町の1「秋風に……」であろう。

小町として、「花の色は……」という一首は、掛詞による連想を媒介とした挿入句的修飾句の表現を用いつつ、物象叙述と心象叙述をつなぐ要にこそ心血を注いだ非常に新しい表現、そしてそののちも他に類例を見出しがたい表現であり、物象叙述と心象叙述の溶け合いの部分に見られるこの表現の重みをこそ眼目とするような独自の一首であつたのだろう。

結語

「わがみをうら(憂/浦)やよをうきなき(憂き/浮きなき)」のように、掛詞(傍点部)を発想の契機として人事的な文脈が想起されていて、その掛詞の直前の位置に「わがみを」「よを」のような人事性の色濃い語句(点線部)が挿入句的に嵌め込まれているという例を見てきた。このような挿入句的修飾句は、前掲佐伯氏の論考では「二種の枕詞のようなもの」と説明されていた。直下の語句との結びつきが強いこと、また、上からの文脈を断ち切りすらするかたちで嵌め込まれていることをとらえての説明なのだろう。窪田空穂氏が小町のk「花の色は……」の一首について、「わが身世に」は、「経る」

即ち暮して行くといふ意のそれと、同音異義の「降る」との関係で、降るの序となつてゐる（傍点稿者）と述べてゐるのも同様に、kの歌の「わが身世に」が直下の「ふるながめ（経る眺め／降る長雨）」との結びつきが強い語句であること、また、上からの文脈を受けて生じているという性質が薄いことをとらえての説明なのであろう。が、本稿に見たような表現のかたちは、挿入句的修飾句の部分を「枕詞」と称するには一般的な枕詞と比べて字数も不定である。また、序詞が『万葉集』の寄物陳思歌以来、物象叙述の文脈を主とし、その序詞が導く下の語句は心象叙述の文脈へと展開していくものであるという特徴と比べても、本稿に見た諸例は異なつてゐる。

本稿に見た問題に次いで検討したいのは、上代の歌から平安和歌に至る掛詞の展開の中で当該歌がどのように位置づけられるか、であろう。万葉歌で本稿に似た例として即座に思い浮かぶものとしては、地名表現が掛詞を含み、その掛詞の直前に挿入句的に修飾語句が添えられている諸例がある。そうした諸例を含め、万葉歌の挿入句的修飾句を伴う掛詞の表現と小町の表現がどれほど近く、どれほど遠いのかという点は、具体的に考察してみたいところである。が、この問題については稿を改めてとりあげることとしたい。

※歌集の引用はすべて、『新編国歌大観』（古典ライブラリー）による。ただし、表記は一部私に改めた箇所がある。

付記 本稿は、JSPS科学研究費若手研究「平安和歌にみる貴族的

恋愛観の成立と展開」（20K12921、代表：室田知香）の調査研究成果の一部である。

(1) この顕註部分について、北村季吟『教端抄』所載の「師説」すなわち松永貞徳の説では、顕昭が「わが身」を男の身とも詠みみ手自身

の身ともとらえてるように解している。高野奈未「近世における古典注釈学——小野小町「みるめなき」の歌の解釈をめぐる——」（『日本文学』六一巻一〇号、二〇一二年一〇月）にもこのあたりの注釈氏の動向が詳しくとりあげられている。

(2) 佐伯梅友「詞苑逍遥」（東京教育大学国語国文学会編『国語』復刊一卷二号、一九五二年四月）。のち、同『上代国語法研究』（大東文化大学東洋研究所、一九六六年二月）に収録。

(3) ただし、通釈部分は、同注釈書の第二一刷（一九七八年六月）を見ると、「うら」に「憂」の意が掛けられているとする解釈を前面に出さず、「ここはみるめのない浦だと知らないから、遠のきもしないで、あまが足のたるくなるまで通つてくるのかしら。会う意志のないわたしと知らないから、あの人と遠のきもしないで足のたるくなるまで通つてくるのかしら、という意をうらに持っている。」としてゐる。竹岡正夫『古今和歌集全評釈（下）』（右文書院、一九七六年一月）は「その後の『大系』では「わが身をう」の続きは削り、『遠鏡』と同様に解しておられる。」と記しているが、このような通釈部分を指している。

(4) 池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究 上』（大岡山書店、一九三三年九月）による。

(5) 尊経閣文庫蔵『在中将集』の七九番歌では「なにはつを」、冷泉家時雨亭叢書『素寂本私家集 西山本私家集』所収『業平朝臣集』の三一番歌では「ナニハメヲ」となつてゐる。

(6) 挿入句的修飾句が他例よりも長い例をさらに探せば、貞登の「ひとりのみながめふるや（経る／古屋）のつまなれば人をしのぶ（徳ぶ／シノブ（植物名）の草ぞおひける）（古今集・恋五・七六九）」という例や、躬恒の「ちりをだにすゑじとぞ思ふさきしよりいもとわがぬるとこ夏（床／常夏）のはな（古今集・夏・一六七）」という例が見出せる。が、本文中に述べたような意味において小町のk「花の色は……」の歌が独特のものを有していることはやはり否めまい。なお、貞登の例の上の句は挿入句的修飾句や掛詞のとらえ方を別様にも解せるが今は省略する。

(7) 窪田空穂『古今和歌集評釈 下』（東京堂、一九三七年二月）。

